

## 研究主題 「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の在り方

### － 5歳児のグループ活動に着目して－

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

荒川区立町屋幼稚園 主任教諭 立石 晃子

#### 第1 研究のねらい

子供を取り巻く環境の変化とともに育ちも変化し、子供のコミュニケーション能力の不足が指摘されている。平成20年の幼稚園教育要領改訂では、「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」が新たに内容の取扱いに示された。学びの芽生えから自覚的な学びへの円滑な移行を図り、小学校教育への接続、連続性を考える上でも、幼児期の教育において言葉での伝え合いを育むことは重要である。

そこで、幼児期の教育から小学校教育への接続期である5歳児のグループ活動に焦点を当て、幼児同士が思いや考えを言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の在り方を明らかにすることを研究のねらいとした。

#### 第2 研究仮説

5歳児のグループ活動において、援助の観点を明確にし、幼児の姿と照らし合わせて適切な援助を行うことで、幼児は自分の思いや考えを、友達と言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるだろう。

#### 第3 研究の内容と方法

##### 1 基礎研究

##### (1) 『言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる』構造」とグループ活動

幼稚園教育要領解説（平成20年10月）より、『言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる』構造」（以下、「構造」と表記。）を捉えた。言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるためには、まず「教師や友達との間に安心感や信頼関係などが成立すること」「感動的、感情的な体験など心を動かす体験を通して感じた思いや考えなどを相手に伝えようとする意欲をもつこと」という、

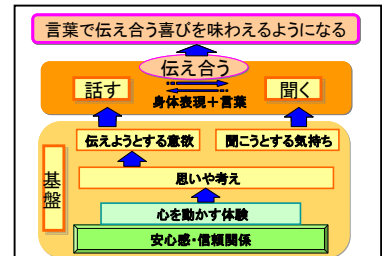


図1 「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」構造」のイメージ図

「言葉を交わすことができる基盤の成立」が必要である。その上で、身体表現を交えながら自分なりの言葉で「話す」ようになり、また、「聞こうとする気持ち」をもって「聞く」ことで話を理解できるようになり、言葉で「伝え合う」ようになる。そして、相手に思いが伝わり共感できる喜びや相手に伝えることの難しさやもどかしさを感じるなどの体験を繰り返す中で、自分の思いや考えが相手に伝わり、相手の思いや考えが分かる楽しさや喜びを感じ、「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」と考える(図1)。

また、グループ活動は、幼児同士が自分の思いや考えを言葉で伝え合いながら、協力し合って進める活動であることから、グループ活動を通して言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」と捉えた。

##### (2) 「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」幼児の姿の定義

幼稚園教育要領解説（平成20年10月）、就学前教育カリキュラム（平成23年3月東京都教

育委員会)を参考に、本研究の検証保育の時期(5歳児Ⅲ期・9月中旬～10月)における幼児の「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」姿を以下のとおり定義する。

グループの友達と活動を進める中で、思いや考えを言葉で伝え合うことによって、互いの思いや考えが分かり、友達への親しみを広げる。

## 2 調査研究

都内の公立幼稚園・幼保一体化施設の、5歳児担任の保育者97名と5歳児の保護者20名を対象に、5歳児の言葉による伝え合いの実態について調査を行った。(平成24年7月～9月)

### (1) 5歳児の言葉による伝え合いの実態

5歳児担任の保育者における調査では、93.8%が幼児の言葉による伝え合いの様子が気になる・少し気になるという回答している。その内容(延べ179回答)のうち上位のものは、「伝えるときの口調が強い」といった幼児の発する言葉や言葉遣いに関するもの(回答数26)、「自分の気持ちを表現することが難しい」といった表現力に関するもの(回答数26)、「相手の話を聞かない」といった相手を受け止める態度に関するもの(回答数24)、「伝わらないとあきらめる」といった意思や自信のなさに関するもの(回答数20)であった。一方、5歳児の保護者における調査では、幼児の言葉による伝え合いの様子が気になる・少し気になるという回答は35.7%であった。5歳児担任の保育者と5歳児保護者に意識の違いが見られることが明らかになった。

### (2) 5歳児の言葉による伝え合いの発達とグループ活動について

5歳児担任の保育者のうち95.9%は、グループ活動の中で幼児の言葉による伝え合いは育っていると思う・少し思うという回答していることから、言葉による伝え合いの発達を促す方法としてグループ活動を取り入れた保育を行うことが有効であると捉えていることが明らかになった。

## 3 開発研究

5歳児のグループ活動において言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の観点構造から「言葉で伝え合う喜びを味わえるようになる」ための援助の観点を捉えることとした。構造を、言葉を交わすことができる基盤が成立する「A 基盤をもつ」段階、「B 話す・聞く」段階、「C 伝え合う」段階の「3つの段階」に分け、それぞれの段階において幼児が必要な経験ができるようにするための「援助の6観点」を明示した(図2)。5歳児のグループ活動の中で、幼児の姿をこれらの段階や援助の観点と照らし合わせ必要な援助を行うことで、幼児は言葉で伝え合う喜びを味わえるようになると考えた。

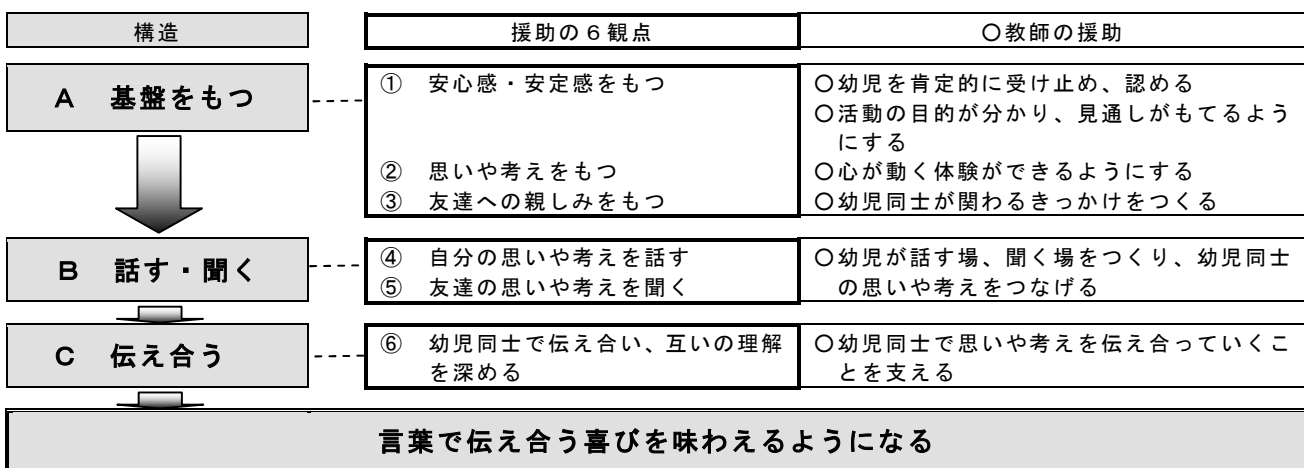


図2 5歳児のグループ活動において言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の観点と教師の援助

#### 4 検証保育

##### (1) 方法と内容

本研究の仮説を検証するため、5歳児学級において10月に4日間の検証保育を行った。「みんなであきまつりをしよう」というテーマで、グループの幼児と店の名前を決めたり必要なものや場をつくったりする活動を設定した。

##### ア グループ構成・活動の進め方・環境構成の工夫（表1）

学級全体に向け、段階「A 基盤をもつ」「B 話す・聞く」に重点を置き援助を行った。

表1 グループ構成・活動の進め方・環境構成の工夫（一部抜粋）

|           | 教師の援助   | 教師の援助後の幼児の姿   |
|-----------|---|---|
| グループ構成の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人が店を選び、集まった幼児同士でグループを構成するようにした。</li> <li>幼児同士が関わりやすい人数（4～5人）とした。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の選んだことができることで不安な表情をせずに活動に向かっていた。</li> <li>グループの中で2～3人に分かれて活動するグループもあった。</li> </ul>   |
| 活動の進め方の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> <li>毎回導入時に身近な話をし、温かい雰囲気をつくるとともに、「自分たちで考えを出し合って売るものを作ってみよう。」ということ伝えた。</li> <li>友達と一緒に活動を進める様子や幼児の話し方、聞き方に触れる話をした。</li> <li>幼児の言葉を取り上げ、認める言葉を掛けた。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>教師に注目し、活動の話の聞いたり自分の考えを話したりしていた。自分たちで売るものを作る意欲をもち、取り組んでいた。</li> <li>分かりやすく話す友達の姿の真似をして話したり、友達の話を聞いたりしていた。</li> <li>友達のよさに気付き、声を掛ける幼児がいた。</li> </ul> |
| 環境構成の工夫   | <ul style="list-style-type: none"> <li>登園時から、幼児が手に取りやすい場所に、今まで扱ったことのある道具や材料を置いた。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>登園をするとすぐに興味をもって材料を見たり、手に取ったりしていた。「これ、使おう。」と友達に伝えていた。</li> </ul>  |

##### イ 抽出児・抽出グループへの援助と幼児の変容

##### (ア) a児への援助（表2）

a児は1日目の店の名前決めでは黙って座っていた。2日目は製作に積極的に取り組み友達に話し掛けたが、伝わらないことで話すことをあきらめてしまっていた。そこで援助の観点「A①安心感・安定感をもつ」「A③友達への親しみをもつ」から援助を行った。

表2 a児への援助（一部抜粋）

|     | 援助の観点・教師の援助   | 幼児の変容  |
|-----|---|--|
| 3日目 | <b>A①安心感・安定感をもつ</b><br>・活動が始まる前に、「風邪引いたの？」と安心感をもたせるように声を掛ける。<br>・a児は一人で進んでいたが、a児に思いがあったようだったのでしばらく見守る。<br>・「すごいものができてきたね。」と認める言葉を掛ける。   | ・教師の方を見て笑顔でうなずいた。<br>・不安そうな表情から明るい表情に変わり、活動を始めた。<br>・自分の作りたいと考えた積み木のテーブルができ、「これ、全部(自分で)考えた。」と満足そうに言った。<br>・嬉しそうな表情を見せ、同じグループのb児の顔を見る。b児と一緒に看板を作ろうとし、ペンを渡した。<br>・b児に字の書き方を教えていた。また、b児がa児にペンを渡しa児が書くというやり取りを行うようになった。b児の名前を呼ぶようにもなった。<br>・b児にセロハンテープを持って行き、貼る様子をじっと見たり、b児に場所を示され、b児と同じようにセロハンテープを輪にして貼ったりした。 |
|     | <b>A③友達への親しみをもつ</b><br>・「b児に教えてあげよう。」と声を掛け、同じグループの幼児を意識できるようにする。<br>・b児が「セロハンテープ。」と言ったので、a児にb児の言葉に気付けるように声を掛ける。   | ・お面が掛かっているラックをb児と一緒に自分たちの場所に運び入れた。その後もb児とやり取りをしながら一緒にお金作りを進めた。   |
|     | ・看板が完成したところで、「いいね、二人で考えていいものができたね。」と認める言葉を掛け、友達とできたことを意識付ける。  |  |
| 4日目 | <b>B④自分の思いや考えを話す</b><br><b>B⑤友達の思いや考えを聞く</b><br>・発言の順番を整理し、a児が話す場面と友達の話聞く場面をつくる。また、「何を。」「どうやって作るの。」などと質問をし、具体的に話せるようにする。<br>・他の幼児には「a児が言ってるよ。」と伝え、a児には「みんなに言ってみよう。」と再度友達に向けて言うように励ます。 | ・店をどのように進めていくかという話し合いの中で、グループの友達に向けて、「看板付けたら。」「お客を作ったら。」「絵を描いてやればいい。」などと自分の考えを話した。また、友達の考えを聞き、分からないことを尋ねていた。<br>・巧技台の蓋を重ねる幼児に対し、再度a児は「それじゃ危ないよ。」と伝えていた。その後、「これも使う。」など相手に確かめる言葉を掛けていた。  |

##### (イ) cグループへの援助（表3）

cグループは日頃からよく遊んでいる幼児同士であり、互いに親しみをもち、安心した雰囲気であった。そこで援助の観点「A②思いや考えをもつ」「B④自分の思いや考えを話

す」「B⑤友達の思いや考えを聞く」から援助を行った。

表3 cグループへの援助（一部抜粋）

|         | 幼児の姿  | 援助の観点・教師の援助  | 幼児の変容   |
|---------|---|--|---|
| 1<br>日目 | ・店の名前や必要なものを決めることを一人の幼児が進めていた。他の幼児は黙って椅子に座っていた。 | <b>B④自分の思いや考えを話す</b><br><b>B⑤友達の思いや考えを聞く</b><br>・一人一人の考えを話す場をつくる。<br><b>A②思いや考えをもつ</b><br>・活動の終わりに「(店で売るものを) どういう風に作ろうか、考えてきてね。」と話す。 | ・「金魚を持って帰る袋(が必要)」などと、自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりしていた。<br>・一人で進めていた幼児は友達の話聞いていた。<br>・金魚作りに関して、降園後、自分で考え折り紙で作ったり、保護者に相談しティッシュペーパーをひねって作ることを考えたり、保護者にペットボトルのキャップで作ってもらったりしてきた。 |
| 2<br>日目 | ・作るものが決まるが、実現することができず活動が進まない。                   | <b>B④自分の思いや考えを話す</b><br><b>B⑤友達の思いや考えを聞く</b><br>・幼児の顔を見たり、うなずいたりしながら、側で話を聞く。<br>・「どう。」とグループの幼児の思いを聞く場を作る。                            | ・二人の幼児は、「ガムテープで(金魚の尻尾を付ける)」「いいね。」と作り始めようとする。一人は納得できずにいたが、友達に「最強にすればいい。」と言われると、気持ちを変えて一緒に作り始めた。その後、他のグループの幼児に「かわいい。」と言われ、嬉しそうにしながら作り続けていた。                             |
| 3<br>日目 | ・自分のしたいことや作りたいものと言うが、友達の考えは受け入れない。別々の物を作り始める。   | <b>B④自分の思いや考えを話す</b><br><b>B⑤友達の思いや考えを聞く</b><br>・幼児の言葉を繰り返し、幼児の思いや考えを受け止めたり、認めたり、共感したりする。  | ・一人で看板の絵を描こうとしていた幼児が、友達に「もうちょっと絵描いたほうがいいんじゃない。描いてあげるから。」と言われたときに、「ありがとう。」と受け入れた。その後、同じグループの幼児も看板作りに加わり、描いているものを言い合っていた。   |
| 4<br>日目 | ・ジャンケンで店員と客に分かれることに決まるが、幼児同士では分かれられず教師の元に来る。    | <b>C⑥幼児同士で伝え合い、互いの理解を深める</b><br>・幼児から話を聞き、解決の方向付けをする。<br>・幼児同士で伝え合い、解決しようとする場を保障する。  | ・「交代交代でやれば。」「まず〇〇さんがお店やさんね。」など、相手のことを考えた言葉を掛けていた。<br>・「静かにして。今、△△さんの話。」と幼児から話す順番を整理する言葉が聞かれ、自分たちで話し合っ解決していこうとする姿が見られた。  |

(2) 検証保育の考察

ア a児への援助について

安心感をもち、もののやり取りを通してグループの友達と関わり、その後、友達に向けて自分の思いや考えを伝えるだけでなく、友達の話聞き、分からないことを尋ねるようにもなり、友達と言葉を使って関わろうとする意欲が高まっていった。これはa児を肯定的に受け止め、友達と関わるきっかけをつくり、また、自分の思いや考えを話す場、友達の思いや考えを聞く場をつくったためと考えられる。この経験を繰り返すことにより、a児は友達と伝え合うようになると考える。

イ cグループへの援助について

グループ活動に対する思いや考えとともに友達に伝えたい思いが高まり、友達に向けて自分のしたいことやしていることなどを話すようになった。これは幼児が活動への思いや考え、目的をもてるように援助を行ったためと考えられる。しかし、幼児同士では友達の思いや考えを聞き、受け入れることが少なかった。教師自身が幼児の思いや考えを受け止めるとともに幼児同士が思いや考えを聞く場をつくり、幼児同士が伝え合い、互いの理解を深めることができるように幼児同士をつなげる援助を繰り返し行う必要があると考える。

第4 研究の成果

- ・ 幼児の姿を捉え「3つの段階」や「援助の6観点」と照らし合わせて援助を行うことで幼児は思いや考えを友達と言葉で伝え合い、友達への親しみを広げることができた。

第5 今後の課題

- ・ 今回の検証保育以外の時期における「3つの段階」や「援助の6観点」を基にした教師の援助の有効性の検証を行い、発達に応じた具体的な援助を指導計画に位置付ける。
- ・ 保護者への意識啓発とともに、幼児が言葉で伝え合う喜びを味わえる活動を実践する。